

## 『雨やどりとりんご』

ある大雨の日のこと。小さな傘をさした男の子がぬれながら歩いているのを庭にいたおばちゃんが見かけました。「大丈夫？少し雨やどりにしていく？」そう声をかけると「ありがとうございます」とにっこり。雨を眺めながらおしゃべりしていたら、おばちゃんが出かけようとしていた方向に行く途中だったことがわかりました。仲良しになった二人は雨の中一緒に出かけていきました。

何日かたってピンポンという音でおばちゃんが玄関に出てみると、あの男の子がリンゴをひとつ大事そうに抱えて立っていました。「このまえは、ありがとうございます。これはフジです」と。「まあ、ありがとう。自分で買ってくれたの？」「はい」。おばちゃんは胸がいっぱいになりました。

そう、ここまでが本当のお話です。この出来事を知ったもう一人のおばちゃんが、話を聞いた夜に夢を見ました。

☆ ☆ ☆ ☆

男の子は「雨やどり」の出来事をお母さんに話しました。「本当に嬉しかったよ！」と。それを聞いたお母さんは「良かったね」と頭をなでながら微笑みました。男の子は、何かもっと言いたそうにしていたので「嬉しかった気持ち伝えたいのかな？」と、聞いてみるとパッと顔を輝かせ、コクンとうなずきました。「行ってきたら」お母さんは優しく背中をそっとおしてあげました。

男の子は、それから数日考えていました。そして、「そうだ、りんごを持っていこう！あの八百屋さんに売っているかな？」と、おこづかい

100円をにぎりしめて走り出しました。「あった！」。喜びもつかのま、値段を見ると1個128円。「どうしよう」……。困った顔で眺めていたら、八百屋のおじちゃんが「どうしたんだ？」と、声をかけてくれました。男の子は、100円を握りしめながら小さな声で話し始めました。わけを聞いたおじちゃんは「わかった。100円でいいよ」と、1番大きなフジをもたせてくれました。男の子は、なんだかとっても嬉しくてたまらない気持ちになりました。

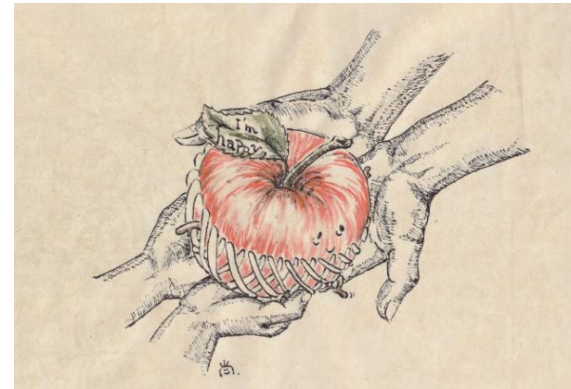
そして雨宿りさせてもらったお家へ。ドキドキ、ドキドキしながらチャイムをおしました。

「ピンポン」

「は～い、どちらさま？」……………。

それから10数年の時が経ちました。

男の子は立派な青年になりました。あの時の出来事がきっかけで、困っている人がいると手を差し伸べられる大人になりました。彼の胸には、〇〇〇のバッジが輝いています……………。



原作：スマイル・ハチドリ

挿絵：尚

編集：スマイル

制作：令和4年8月27日